

日口浮魚・底魚類（総説）

最近の動き

2021年に開催された「日口漁業委員会第38回会議」の決定に従い、日口両国の科学者は以下の諸活動を行い、両国が双方の水域内で利用している同一資源について最新の情報を交換し、資源状態に関する見解をとりまとめた。2022年10月にメール会議により「さんま、まさば、まいわし、かたくちいわし、いかおよびすけとうだらの生態学および現存量に関する意見交換会」が開催され、マダラ、スルメイカ、アカイカ、ニシン、サンマを対象として調査研究結果の報告、議論を行った。2022年11月にWEB会議により「第36回日口漁業専門家・科学者会議」を開催し、漁業や資源状態に関する資料及び意見の交換を行い、漁況と資源状態に関する共同報告と2023年の調査協力計画案を作成した。

ロシアと我が国漁業の歴史

我が国のロシア沖における漁業は、日露戦争の結果による領土の拡大に伴う漁場の広がりもあり、大正時代には母船式カニ漁業、帆船タラ漁業等が興った（斉藤 1960）。昭和初期には、母船式さけ・ます漁業、トロール漁業を含め発展したが、第2次世界大戦によってこれら漁業は大きな影響を受けた。第2次世界大戦後、マッカーサーラインによって我が国漁船の漁場は著しく狭められていたが、1952年に同ラインが撤廃されるとともに、ソ連沖公海新漁場の開発が積極的に進められた（北野 1980）。1953年に北方四島周辺太平洋岸漁場、1956年にサハリン東岸トライカ湾、1957年にサハリン西岸タートル海峡で調査が行われ、スケトウダラ、ホッケ、カレイ類等の底びき網漁場が開発された（北野 1980）。1956年には日ソ漁業条約、1969年には日ソかに取決、1972年には日ソつづ取決が結ばれた。我が国漁船のソ連沖での漁獲量は、1975年には北海道沖合底びき網が38.9万トン、北転船がカムチャツカ半島周辺で73.3万トン等であった（北野 1980）。

ソ連による日本沖での漁獲量は、1975年にはサバ類13.3万トン、マイワシ12.2万トン、スケトウダラ13.4万トン、イトヒキダラ10.6万トン等、合計52.7万トンであった（北野 1980）。1976年12月にソ連は漁業管理法を制定し、200海里漁業水域を設定したが、我が国も1977年3月に同漁業水域を設定した。1977年には日ソ・ソ日漁業暫定協定、1978年には日ソ漁業協力協定が結ばれ、相互に相手国200海里水域で自国の漁船が操業できるようになった。1978年にソ連漁業水域内で我が国に与えられた漁獲割当量（漁獲枠）は、スケトウダラ34.5万トン、イカ14.6万トン、イカナゴ6.5万トン、マダラ4.5万トン、サンマ6.9万トン等、合計85万トンであり、200海里水域設定以前の漁獲量に比べかなり減少した（北野 1980）。同年の日本漁業水域内におけるソ連漁業への漁獲割当量は、マイワシ・マサバ31.8万トン、スケトウダラ8.0万トン、イトヒキダラ13.8万トン等、合計65.0万トンであり、200海里水域設定以前の漁獲量とそれほど差はなかった（北野 1980）。

相互の相手国200海里水域内での漁獲割当量の年推移とし

て、ロシア（ソ連）水域における我が国漁船に対する割当量を図1に示す。割当量は、1979～1985年には60万～75万トンの範囲であったが、1986年には15万トンへと大きく減少した。1987年にはそれまでの相互枠（無償枠）の他に、10万トンの有償枠が設けられた。1988年には相互枠と有償枠を合わせてスケトウダラ12.8万トン、サンマ6.5万トン、イカ7.5万トン等、合計31万トンであったが、その後減少を続け、2001年にはスケトウダラ0.5万トン、サンマ3.6万トン、イカ0.9万トン等、合計6.0万トンとなり、1978年の7%にまで落ち込んだ。2005年以降、5.6万～5.8万トンで推移していたが、2013年は6.7万トン、2014年は7.6万トンに増加した。2015年以降は6.5万トン前後で推移していたが、2019年以降は主にサンマ、サバ類の増枠により増加し、2020～2021年は9.1万トンであったが、2022年は7.6万トンに減少した。

日本水域におけるロシア漁船に対する割当量を図2に示す。割当量は、1985年以降、ロシア水域の我が国漁船に対する相互枠と等量で推移しており、1989年には21万トンであったが、1994年には10万トンまで減少した。1998年以降はさらに減少して10万トンを下回り、2001年には5.2万トンとなり、以降5.0万～5.5万トンで推移した。2014年には7.1万トンに増加したが、2015年以降は6.2万～6.5万トンであった。2018年以降増加し、2020年は9.0万トンであった。魚種の内訳は、1980～1990年代はイワシ（マイワシ、カタクチイワシ）・サバ類（マサバ、ゴマサバ）が最も多く60～90%程度を占めたが、2001～2012年はイトヒキダラが50%前後を占め、イワ

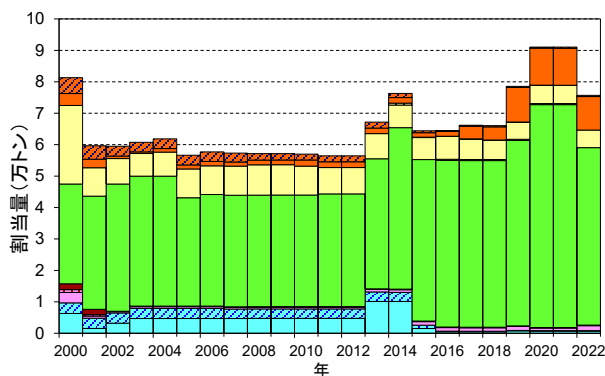
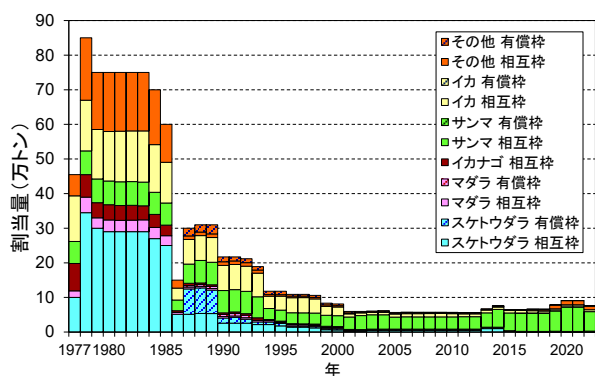


図1. ロシア水域における我が国漁船に対する漁獲割当量（下図は近年の拡大）

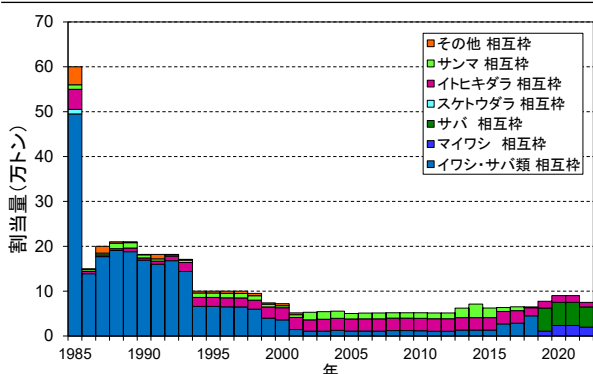


図2. 日本水域におけるロシア漁船に対する漁獲割当量
イワシ・サバ類相互枠は2018年まで。2019年からはマイワシ相互枠、サバ相互枠に分離。

シ・サバ類とサンマがそれぞれ20~30%程度となった。2013~2015年はイトヒキダラが40%前後になり、サンマが33~42%とやや高くなった。2016~2017年はサンマが13~14%に低下し、イワシ・サバ類が43~44%に上昇し、さらに2018年にはイワシ・サバ類が69%まで拡大した。2018年以降は減少傾向を示し、2022年の割当では、サンマの割当が0、マイワシ(2.0万トン)、サバ類(4.5万トン)、イトヒキダラ(1.0万トン)となり、全体の枠は7.5万トンに減少した。

日口両国水域にまたがって存在する資源に関する資源評価

日口間には、北西太平洋の生物資源の保存及び最適利用を考慮し、相互の200海里水域で他方の国の漁船が漁業を行うために、1984年に「日本国政府とソヴィエト社会主義共和国連邦政府との間の両国の地先沖合における漁業の分野の相互の関係に関する協定」(日ソ地先沖合漁業協定)が締結され、これに基づき日口漁業委員会が設置されている。日口漁業委員会では、日口両国水域に共通に存在する主要な魚種系群の持続的利用を図るため、科学者グループを設置して、それらの資源状態について、日口漁業専門家・科学者会議での議論を踏まえて協議し、報告書を作成している。スケトウダラ、サンマ、マサバ、スルメイカ等については、適切な資源評価及び評価結果を踏まえた資源管理のために、ロシア水域や周辺海域における分布や資源状態に関する情報が重要であり、引き続き日口科学者による意見交換会等の機会に、これらの情報収集に努める必要がある。

ロシア水域の重要資源に関する情報

マダラ、キチジ等の重要資源に関して、ロシアから入手可能な情報は少ない。ロシアは、これら魚種についても資源調査を基に漁獲可能量(Total Allowable Catch:TAC)を設定しており、当該TACは基本的に資源動向を反映していると考えられる。ここでは、千島列島と日本海の水域において、ロシアが設定した主な魚種のTAC数量を表1及び2に記載する。

これらの水域における近年のTACはおおむね増加傾向を示している。その中でいずれの水域でもニシンのTACが2021年に急増しており、特に過去漁獲がほとんどなかった千島列島域

表1. ロシアの千島列島、沿海州の水域におけるTACの合計値(トン)

魚種名\年	2019	2020	2021	2022	2023
スケトウダラ	202,300	214,700	220,000	228,400	229,400
マダラ	18,900	20,550	21,880	26,400	26,300
ホッケ類	15,670	19,100	19,450	25,350	20,500
メヌケ類	3,610	2,630	2,780	3,040	4,010
キチジ	180	180	180	180	180
カレイ類	6,930	6,620	6,720	7,230	4,150
ミズダコ	—	—	189	189	188
ニシン	—	—	1,960	1,960	1,960

表2. ロシアの日本海水域におけるTACの合計値(トン)

魚種名\年	2019	2020	2021	2022	2023
スケトウダラ	21,500	25,800	37,500	37,500	43,700
マダラ	19,300	24,200	18,300	18,300	13,300
カレイ類	3,300	1,090	1,114	1,114	1,153
ニシン	350	670	9,700	9,700	9,700

におけるニシンの急増は注目に値する。また、日本海域のスケトウダラTACも近年顕著に増加しているが、これは沿海州水域の資源状況によると考えられる。

執筆者

北西太平洋ユニット
北西漁業資源サブユニット
水産資源研究所 水産資源研究センター 底魚資源部
塚本 洋一

参考文献

北野 裕. 1980. 北海道海域底魚資源. In 青山恒雄(編), 底魚資源. 恒星社厚生閣, 東京. 204-228 pp.
齊藤市郎. 1960. 遠洋漁業. 恒星社厚生閣, 東京. 318 pp.